

留学生に関わる問題と対策

——意見、情報交換を通して

安井 永子

名古屋大学文学研究科

安井：お忙しいところ、お集まりいただきありがとうございます。今回、このような留学生に関わる問題に関するワークショップを開かせていただくことになった経緯は、今までいろいろなご相談を先生方や留学生から受ける中で、似たような事例が多く出てきているため、どのような課題があるかということ、それに対してどのように対処がされてきたかということを情報共有することで、少しでも先生方に今後の対策として役立てていただければと思ったことにあります。また、私の方でも把握しきれていない課題や問題があれば、ぜひ先生方にもお話ししたいと思っています。

資料ですが、いくつか話題にしようと思ったことを挙げております。おそらく時間内には全てカバーしきれないとは思いますが、主に1と2あたりを中心に、まずはこちらから「こういうことがあります」というお話をする中で、先生方にもいつでもご質問やご発言をいただければと思います。よろしいでしょうか。

研究生の受け入れについて

それでは、まず研究生の受け入れに関するご相談や問題が一番多くありましたので、それを最初に取り上げます。資料にあるのは、2年前、24年度に行ったアンケートで、「研究生になりたいがどうしたらいいか」という多数のメールの問い合わせに対して先生方がどのように対応されているか、どのようなやりとりを経て最終的にその学生の研究生としての受け入れを決定されているかということに関して、20名の先生方にお答えいただいた結果です。最近、受け入れの問い合わせのメール文があまりによくできすぎているものが多かったり、複数名からほとんど同じフォーマットのメールが届いた、という先生が複数いらっしゃったことで明らかになったのですが、おそらくメールを作成する仲介業者がいるのではないかと、ひょっとすると研究計画書もあまりにも完璧なものが最初から送られてきたりする場合は、疑った方がいいのではないかと、ということが起こっております。

私の方でも、研究生の出願書類を見てちょっとおかしいと思うところは先生方に個別にお知らせはして



いますが、見抜けないことも多くありますので、一部の先生方はすでにされているようですが、スカイプなどで事前に面接をし、研究計画書の信用性を試す必要性が出て来ている、ということです。

また、これも過去の事例に基づくのですが、今年度から、中国の大学出身者には学位や成績証明書の認証システムを利用し、その後その認証証を送付させるようにしています。過去に学位詐称があったらしく、無記名での密告があったため、若干不公平ではありますが、中国の大学出身者に対してだけそういった認証システムを行っております。

林：ただ、僕がちょっと不思議だなと思ったのは、学部研究生を受け入れるときにこれを要求しているんですよ。

安井：はい。

林：大学院に進むときは要求していないですよ。

安井：してないです。

林：だから、日本のほかの大学の研究生でまず日本に来て名大の大学院を受けるときには、なしでいいんですよ。

安井：そうです。

林：だから、大学院の入試より研究生で入るときの方が書類が厳しいのはどうなのかなと。何かおかしい感じが。

安井：そうですね。

田村：他大学に、要するに緩い基準で研究生になって、そこの研究生ですということで受けると、出身大学の成績証明書その他は必要ないんですか。

林：いや、出身大学の卒業証明は要りますよね。

安井：はい。

田村：卒業証明、学位は要るけど、その審査がない。

林：認証みたいなものは要らない。

安井：確かに、それは入試委員のほうに、こういうシステムがあることをお知らせする必要があるかもしれません。

A：そういうケースってけっこうあるんですか。

田村：ほかの大学に行ってから来る。

A：ほかの大学の研究生で、大学院を受ける。

林：あります。

A：ありますか。

安井：たまにあります。

林：それが通るかどうかは別ですけど。

田村：認証というのは、これはどこがやっているんですか。

安井：中国政府機関直轄の財団、「中国教育部学位与

研究生教育发展中心 (CDGDC)』というものです。

田村：中国の官公庁の一部みたいな感じになっているのか、それともどうか。

林：よく分からないです。

田村：そういう認証を代行すると、いくらでもそういうことが可能になりますね。でも、ある程度はその認証が出たらしやうがないですよ。

安井：そうですね。それが唯一の信頼できる機関というか。

林：一応、その認証する機関は信頼できるというのを、実際にこういうのを使い始める時にそんな話がありましたよね。

安井：はい。これは文学研究科だけでなく、全学的に。

田村：密告の手紙があったというのは、別に名古屋大学じゃなくて文科省か何かにあったんですか。それともどこかの大学に。

安井：私が着任する前のことですが、文学研究科に無記名で手紙があったということです。今回の応募者の中に学位詐称者がいます、というような内容だったそうです。ですので、認証システムを使わざるを得ないということになってしまいました。もちろん真面目な応募者も多いですが、そういう巧妙なことをしてくる人もいるみたいなので、その点ご注意ください。

あと、これは受け入れ後のことにも関わるんですが、前回の教授会でも少しアナウンスさせていただきましたが、国費による研究生は、来年度以降、研究生を開始した年度内に大学院入試に合格しなければ、大学院進学後は国費の受給ができないということになりました。これまでは2年間チャンスがあって、2年間研究生をした後に大学院に進学しても、つまり、研究生を開始した年度内に大学院入試に合格できず、その次の年度で合格した場合でも、国費の受給が可能だったんですが、来年度からそれが1年だけということになりました。

田村：まず、留学生の制度に詳しくないと分からないんですが、研究生にも国費は支給されるんですね。

安井：そうです。大使館推薦や大学（協定校）推薦の場合、研究生として申請します。

林：これは日本国政府ですか。

安井：はい、そうです。

田村：日本国政府の国費の留学生の支給というのがあって、それは月間いくらぐらいですか。けっこうある。

安井：そうですね。15万弱ほどあります。

田村：暮らしていけるだけあって、それをもたらってどこかの研究生になって、例えば10月ぐらいに研究生になるという人がけっこう多いですね。そうすると、その年の2月に行われる大学院の入試に合格しないと、4月から後の受給資格は消滅するんですか。

林：4月からも研究生として続けるならもらえるんですよ。

安井：はい。そうですが、その次年度に大学院入試を受けて受かって、大学院入学時からは国費の支給が行われず。研究生のままでは2年間まではもらえません。ただ、その場合は、その後、大学院に受かって、もう受給はできません。

B：研究生のままなら、最長2年間はもらえる。

田村：最長2年間はお金はもらえると。それで、例えば10月に来て、年が明けて2月の試験に合格しました。そうすると、4月から大学院生になって国費がもらえますね。

安井：はい、その場合は、原則、大学院を卒業するまでもらえます。

田村：卒業するまでもらえる。なるほど。難しいな。そうすると、10月に来て、2月に落ちて、年度変わって、次の年の9月に例えばマスターを受けて合格しました。そうすると、1年半たって4月に入学するとそこから先は国費じゃないということですね。

安井：そうです。研究生を開始したその年度内に受かっておかないといけません。

田村：年度内には受かってないのに、受給期間内には受かっているんだけど、留学した年度に受かっていないのでお金は切ると。

安井：そういうことです。

田村：すごくややこしい。

林：その年度というのは、4月～3月固定ですか。

安井：G30の場合は10月～9月です。

林：今後、G30以外で10月入学生が発生した場合に、要するに10月からその次の年の9月までは第1年度だと言ってしまうと、2回目で合格しても年度内という計算が成り立つわけでしょう。

安井：はい。

田村：10月入学、10月に大学院生になりますという人は。

林：10月から翌年9月までは1年度ですよ。10月入学は9月までが1年度だという計算がもしできるのであれば、2回チャンスがあるわけですね。

田村：そうですね。2月の試験と9月の試験とあるわ

けですね。

安井：そうですね。

田村：すごく詳しい人じゃないと分からなくなりますね、このお金の話は。でも、一番じかに響く話なのに。

安井：そうですね。なので今まで以上に国費による申請者の審査を厳しくした方がいいというか、国費だからと思って安心して来て、入試に合格できなかったためにその後の国費が打ち切られるということになってしまうと、本人もかわいそうといえますか。

田村：そうですね。国費の留学生の選抜というのはどこがやっているかという、文科省か学振か何かがやっているわけですね。

安井：はい。

田村：その試験というのは、信頼性の高いものなんですか。

安井：そのはずですよ。一般的な国費の募集が行われる「大使館推薦」の場合は、まずは受給が決まる。その後どこかの大学に申請する、という流れです。

田村：それは一般に留学して割とそういうケースが多いんだろうけれども。

安井：ただ、それで研究生になっても、大学院の入試に受かるとは限らないということです。

田村：国費に関しては、「国費の人がおたくを希望しているから受け入れますか」という問い合わせが来ますよね、それぞれの専攻宛てに。それで「受け入れます」と言うと研究生になる。いくつか大学を受けますよね、国費なので。それでいくつか通ったら、どこかを選ぶ。

安井：はい。国費の学生は、ある程度優秀だとは思っているので、信頼できると思います。

田村：落ちる人もいます。

安井：そうですね。そういう可能性も考えて、ちょっと厳しく。

A：専門的な試験をしているわけじゃないので。

安井：そうですね。

田村：そうですね。語学の試験だけみたいな。

林：日本語能力。

安井：と研究計画などです。

A：あとは、本人がこういうことをやりたいからというので大学や教員に問い合わせが来るんですが、こちらとしてもあまり判断材料がないので。

C：すごく急いでいるんです、向こうが。

A：受け入れないと言うと、また別のところを探すことになるんですが、そんなことはできないような日程

で問い合わせが来るので、しょうがないか、となっちゃうんです。

田村：私の専攻のところで受け入れている国費の人は、本当に専門もピタッと決まっているし、非常にお互いに幸福なケースで決まっているので、あまり問題は感じたことがなかったんですが、そうなるとけっこう難しい制度ですね、運用する国費というの。

安井：受け入れに関しては、先生方、いろいろな方法をとられているということですが、何かご質問とかありますか。アンケート結果からとか。こちらはご参考にしていただければと思います。

田村：スカイプでやりとりをするというのは、広く行っているんじゃないんですか。そうでもないんですか。

林：中国はスカイプが通じないので、できません。

田村：できないんですか。

林：別のテレビ電話みたいなのは何ぼでもあります。フェイスブックと同じで、スカイプは駄目です。

田村：簡単に中国とテレビ電話でやりとりするというのは。

林：今ではあります。

田村：あることはある。

林：中国製のソフトを入れれば。

田村：中国製のソフトを入れるためには、こっちが中国語をある程度読めないとか駄目なんですか。

林：いや、日本語版もあります。

田村：日本語版もありますか。

林：ご入用でしたら、ご紹介します。

田村：ちょっと紹介していただくのはいいかもしれないですね。スカイプが駄目でしたということになったら分からなくなりますもんね。

研究生受け入れ後について

安井：受け入れ後の問題としては、大学院入試に不合格になった学生がいる場合、在留資格の期間が残っていても、所属先がなくなれば滞在が認められないので帰らなくてはいけなくなる、どうにかしてくれと泣きついてくるような学生がいるとお聞きしております。

このあたりは、おそらく先生方がされていることだと思いますが、受け入れる際に、不合格になった場合どうするかということを先に考えさせておくとか、研究生という地位が大学院入試の合格を保証するものではないということを理解させておくということですね。研究生期間の延長もできますので、次年度に大学院入試に合格できるような力を持った学生だとか、真

面目な学生だということが判断できる場合であれば、延長を認める先生方もいらっしゃると思います。

プランBといいますか、ここ以外の研究科や大学院の受験を勧めておくということですが、特にアジア系の留学生の子たちは、せっかく先生が研究生として受け入れてくれたのに、それを裏切ってほかの研究科や大学院を受けるのは気が引けるという考え方を持っていることが多いようなので、そういうことはないということをお話しいただくと、バックアップとしてほかの研究科や大学院の受験をすることができるのかなと思います。本当にどこも受けていなくて、「ここしか受けていません、もう帰るしかないです」と言って、涙ながらに話しに来るような人もいます。

田村：安井さんのところに行くわけですね。

安井：あります。もちろん先生方のほうにもあると思いますが。

田村：この概要の1の(1)の②の最初に、所属先がなくなれば滞在は認められなくなると言っているのは、これは研究生としてビザをもらってやってきて、大学院を受けました。でも落ちました。そして、研究生としても延長できません。と。しませんという場合ですね。

安井：はい、そうです。

田村：だから、研究生として延長を許せばこれはOKなんですね。

安井：はい、そうです。

林：だから、最初に来た時に、1年の就学ビザを10月にもらっていても、2月か3月の時点で研究生としての籍が切れちゃって、大学院に入学できなければ、もうそこで。

田村：帰らなくちゃいけない。

林：あと半年、ビザ的には残っているけれど、アウトと言われるということですよ。

田村：でもその場合は、要するに、さらに半年勉強しても到底大学院に合格できるようにならないから、もうここで研究生をやめてもらった方が後腐れなくていいというふうに言って、やめてもらう。そして、もう帰ってねということになる。そういうことですよ。

安井：そうですね。

田村：研究生として期間の延長を認めるという手は常に残っているわけですね。

安井：はい。ただ、もちろん、この先大学院に受かるという保証があるような学生でないと、おそらく先生方も延長は認められない。

齋藤：それは、でも、1人それをやってしまうと切りがないです。だから、ある程度きちんと、もう1年間

しか認めないぐらいの感じであらかじめ決めておかないと。講座の中とかで。そうしないと「あの人が大丈夫だったから私も大丈夫だ」みたいな理論というのが出てきてしまうので。

田村：そうすると、大学院に入れそうもない研究生がずっとたまっていく。

齋藤：「私はがんばります」みたいな。がんばりますと言われたら、まあがんばるのかなと思いますし、死に物狂いでがんばったらすごくアップするかもしれませんが、この人もそうかなと思っちゃいますよね。だからある程度その辺は最初にきちんと取り決めておかないと。

田村：それはご経験から言って、例えば1年なら1年で切っておくという形でやるわけですね。

齋藤：だいたい私なんかはそうしています。

田村：今、研究生の受け入れとか期間延長とか、それぞれの専攻で自由に決めてやっていますよね。でも、もうちょっと制度的に統一感がある方が運用しやすいでしょうし、そのぐらい留学生の人数も増えてきているんじゃないかと思うんですが。

林：ただ研究生って、退職した社会人のおじちゃん、おばちゃんが勉強しに来ている場合もあるので、1年以上延長認めないとしたら困りますよね。

田村：そういうこともあるのか。

林：社会人が。

田村：同じルールでやっているわけだから。留学生の場合、例えば話し合って1年で決めておくんだけど、それを延ばしてしまうとまずくなるのは、どういう点でまずくなるわけですか。結局、研究生のビザをもらいながら、日本で例えば仕事をして、実質的には勉強してなくて、ただあちこち行って稼いでいるだけの人が生じるというような問題は一つ考えられますよね。

A：稼げない。

林：ある程度以上は稼げない。

田村：モグリになっちゃう。

林：だから、ダラダラ。

田村：でも、それはかつて日本人がパリでやっていたようなことになるわけですが。いっぱいそういうのがいたんだろうけど。そうすると一律も難しいんですね、切るのは。

安井：そうですね。

田村：来る時にそれぞれ了解を得ておくみたいな話になりますね、留学生。

林：あと、私は中国の大学にも留学していました、



これもちょっと知っておいていただきたいのは、研究生って漢字で3文字、書きますよね。これは中国語で大学院生のことなんです。だから、先生の研究生になりたいですというふうに中国人が日本語でメールを書いてきたときに、「この研究生というのは名大の研究生の意味やな」と。「中国語の大学院生の意味ではないな」って確認しておかないと。たいがい知っていますけど、今の中国人。紛らわしいので気を付けた方がいいと思います。

安井：分かりました。

田村：それ、すごく大事。

林：研究生とか、助教授、准教授とか、わざわざ日本の制度は中国と違う意味で同じ言葉を使う、同じ意味で違う言葉を使うなど紛らわしいので。研究生というのは、中国語で言う研修生なのかな。たぶん日本語の、名大で言う研究生の意味になるのだと思います。大学院はこういう形では受け入れられないというのははっきり言わないと。でも、それで間違っていましたと言われたり、それは知りませんでしたと言われたりは、僕、実はないんですが。分かっていますと向こうは言うてくるので。

田村：確かめておかないと、大学院生になるつもりでしたという話が有効になる可能性がありますね。

林：そうなんです。なので、ウェブに載っているガイドラインとかも、ちょっと文言を考えた方がいいかもしれない。

安井：分かりました。ありがとうございます。

林：というのが1つと、それからもう1つ、1の(1)で、代行業者の利用に注意が必要と書いてありますけれども、中国で今、一学生が日本に留学したい、その書類を全部そろえようと思うと、たぶん代行業者にお金を払ってやってもらわないとそろわないんだと思うんです、多くの場合。だから、代行業者＝怪しいとか、代行業者＝悪みたいにしちゃうと、ちょっとかわいそう

かなと。日本人が欧米に留学するときも、代行業者みたいなものを使っているわけでしょう。あるじゃないですか、留学させる会社が。ああいう感じのものでしたら、代行業者を使ったら怪しいと言ってしまうと、ちょっと言い過ぎかなという気がします。

安井：難しいですけど、そうですね。ありがとうございます。

古尾谷：その関係のことで1つ情報提供ですが、先ほど研究計画書とかが極めてよくできすぎているというケースのお話がありましたけれども、私の経験では、明らかに偽造された書類を出してきた人がいまして、あえてこなれていない日本語を、間違った日本語を使って、外国人が不慣れた日本語で書いたかのような、そこまで巧妙にやってきているケースがありましたので、お気を付けいただければ。

林：日本語がたどたどしいから大丈夫やろというわけではない。

田村：でも、手紙でやりとりしていたのでは、たどたどしいパターンであれ、流麗なパターンであれ、誰かに書いてもらうということはいくらでもできるので、分からないですよ。そうすると、結局、どこかでテレビ電話をやるしかないかもしれないですね。

安井：そうですね。電話だったり、スカイプだったり。

田村：テレビじゃなくてもいいわけだけど。音声電話だけでもいいわけ。

林：大勢でやると、誰がしゃべっているか分からない。

安井：確かに。

古尾谷：今のケースで偽造だというのが分かった理由は、女性の履歴書を出してきたんですけども、英語の能力証明書の写真が男性だったからです。

田村：それは失敗ですね。

齋藤：あと、受け入れの問題でよくあるパターンでしょうけど、皆さんに同じメールを送るというのはよくありますよね。もうちょっとちゃんとした人でさえも、例えば私と佐久間先生と宮地先生のところみたいに、割と分野が似ているので、結局同じようなメールになるというか、同じ人が同じように送ってくるようなことがあるので、その辺はうまく連絡を取っていかないと、だんだん順繰りという感じになっちゃうというのがよくあります。私が断ったのが次に行くみたいな感じで。一度3人で見たら、けっこう似た人がありましたよね。

田村：それはどこかで受け入れて、似ていればいいん

ですけどね、まだね。

齋藤：一斉というのがありますから。

田村：無数に送る、いろいろな大学にダブッと送るアプリケーションは、それはあり得るとは思いますけど。

林：学生の就活と一緒にですね。

齋藤：名前が違っていたりします、時々。

宮地：宛名が。大学が違ったり。

齋藤：私は何とかじゃありませんがって。

安井：いろいろ難しいことばかりが増えてしまいましたが、ありがとうございます。ちょっとずつ、こちらでも何か良い対策を考えられればと思います。

就学が困難になる学生への対応について

安井：次に、就学困難になる学生への対応ということで、国際教育交流センター交流部門の方でワーキンググループがありまして、そちらの先生方が報告してくださった資料、作成してくださった資料を基にお話しできたらと思っております。

私の方でまとめたものを概要には書いているんですが、ちょっと長い資料ですけれども、何があるかといいますと、就学が困難になる学生の理由として、経済的な問題、学力の問題、日常生活の問題、在留資格の問題と4つに分けての報告です。おそらく経済的な問題、学力の問題と日常生活の問題というのが重要かなと思います。

まず経済的な問題ですが、受け入れる前に、もちろん経費支弁能力があるということを証明してもらっているので、本来であれば、お金がなくなりましたと言って問題になるようなことはないはずなんですけど、これまでも、払えなくなったり授業料の未納が続いた結果、退学や除籍になった留学生が何人かおります。あとは、家族の方でいろいろと状況が変わって、もう支援が受けられなくなったというケースもあります。

すべてのケースに対して対応できるような解決策があるわけではないんですが、ここで報告書の方にあります一つの解決策としては、授業料の未納を年度末まで待ってしまうために、結局、年度末になって払えませんでしたという問題が出てくる可能性があるため、未納の学生に対しては細かく指導をしていけばいいのではないかと思います。これで解決できるようなお金を実際に持っている学生ならいいんですが、本当になくなってしまった学生に対しては、民間の奨学金の案内というのが130会議室の裏の掲示板に常にある

ますので、そこを見て奨学金に応募してくださいという案内をしたり、あるいは名古屋大学留学生後援会が最大5万円まで無利子でお金を貸すという貸付金制度を実施していますので、それを利用してもらったりということが、今こちらで提供できる解決策になっております。

田村：年度末まで待つという問題は、それは例えば前期、後期に分かれていて、前期の授業料未納の人が年度末まで督促を受けなかったということですか、今までは。

安井：はい。

田村：そうすると、前期を納めなかった人は、後期の頭ぐらいに、ちょっとどうなっているのという督促が今度から行くと。

安井：はい。それを義務化した方がいいのではないかということが、今。

田村：前期を納めて、後期を納められなかった場合は、どうなるんですか。

安井：そうなった場合に除籍処分になっていたと思います、今まで。

田村：そうすると、前期は納めたけど後期は納めませんでした。それで納める期間の猶予ってあるんですか。多少はあるでしょうね。何か。

安井：はい。

田村：その猶予が切れたら、もうそれで終わり。

林：後期って3月31日まででしょ。3月中とまで言うまでは。でも、3月の何日までですよ。本来、先払いじゃないですか。

田村：そうか。後期の初めに払ってないといけなそうですね。

林：だけど、そこで払ってないからすぐ駄目になるというわけじゃないでしょ。

田村：じゃない。

林：やっぱり年度末まで待っているはずですよ。昔、うちにいた学生で僕にまでメールが来たことがありますけど。「どうなってるんや」と言ったら、その時、払っていましたが。

安井：単に忘れているというようなケースもあるんですかね。

田村：でも、今、高いから、使っちゃったら払えないでしょ。

中村：留学生は分からないんですが、授業料の免除制度というのがあって、それに申し込んでいる間は猶予される。それで、前期だと8月末ぐらいに分かるんじゃないかなと思います。その年度の予算が分か

ってくるので、その時に。だいたい留学生の子は全額免除は少ないんですが、半額免除、残りの半額が払えるかどうかというところで、そういった免除が決まって何週間以内ということで。後期は、年度分の予算がその時点で分かっているから、仕方なかったかと思いますが。

安井：そうですね。免除をだいたい申請しているみたいですが、認められなかったといって、どうしようというふうに来る学生も時々います。免除を当てにしてしまうのもちょっと問題ですね。

お金の問題はこちらができることも限られています。奨学金の情報が常に掲示されているということ、留学生後援会による「貸付金制度」があるということは、もし留学生が何か情報を求めているならお知らせいただければと思います。

あと、学力低下の問題ですが、未然防止と早期発見に向けて、それから長期的に学力不振が続く場合にどうしたらいいかと。その3段階でこちらでも報告されていますが、未然防止というのは受け入れ時、その時に適切な審査を行うと。名古屋大学に入っても問題がない学力を持った学生であるということを事前に審査しておくということです。

また、長期的に学力不振が続く場合です。言語の問題などがありますが、母国の親族へ連絡して、両親から話してもらうなど、いろいろ対策はあるのかもしれませんが、最終的には学生に、これ以上できないということをお納得させる、これ以上学力不振が続いているのであればここに置いてあげられないということをお納得させた上で、在留期間の更新に必要な書類の発行を断って、ある意味半強制的に退学させるということも仕方ないというふうに、この報告書ではまとめられています。何かそうやってフェードアウトしていったような学生は今までいましたか。

林：これは、留学生に限らないですよ。

安井：そうですね。確かに。

林：日本人の学生でこのパターンって、けっこう問題になっているわけですよ。留学生の問題をこの中からどうやって切り分けるのかということの方が大事なんじゃないかなと。

安井：そうですね。ただ、留学生の場合は卒業できなくても何となくずっと学生という身分を利用して日本ににいるということが可能になってしまうので、そういう意味では深刻ですね。

林：でも、日本人も卒業できなくても何となく7～8年、大学の籍を持っているみたいな人もいます。

安井：留学生の場合、在留資格を維持するためだけに
というようなことになる場合もあります。

田村：大学としては、在留資格を維持するための手段
として使われるのを避けたいんですよね。

安井：そうですね。

田村：お金を払って勉強したいと思っている人だった
ら、それは留学生であれ、日本国籍であれ、長くいた
いんだったら居続けていいんだけども。

安井：はい。

田村：母国の親族に連絡して、おたくのお子さんは学
業不振だからちょっとネジを巻いてください、みたい
なことを言うわけですか。

安井：そういうことも、はい。

田村：でも、それが効くかどうかは分かりませんよ
ね。かなり年いって人も、留学生だったら出てきま
すし。

宮地：なかなか母国の親族に連絡がつかなくてという
ことはあります。学力の問題もあって、学部生なん
ですけど、日本語学の。良い成績を本当は取りたくて、
すごく優秀な子なんですけど、自分ではまだ単位が取
れるような力がないからといって大学に出てこなくな
ってしまって、いわゆるひきこもりの状態になった
子がいるんですが、その後休学ということになり、さ
らには母国で家族が病気になって、それもあって帰ら
なきゃいけないし、帰って日本に戻ってこれなくな
った子がいるんです。

そうすると、その家族のほうに問題があって、それ
は特殊なケースといえそうですが、本人の学力だけ
じゃなくて、そこに経済や家族の問題が絡んでく
ると、家族をよすがに本人に戻すということも難しい。
先ほどの事例でも学力・経済だけでなくというのが
絡むケースが多いと思うんですが、そうするとその
家族へ連絡ができないということも割とある。

実は、その子はまだずっと休学を延長していて、も
う最大になっているので本当は復学か退学届を出さな
いといけないんです、復学しないのであれば。休学延
長の意思あるいは退学の意思を表明しないと自動的に
復学になってしまって、授業料を払う義務が生じる。
だけど本人と連絡が取れない、家族とも取れないとな
って、実は事務のほうから、研究室の判断で休学延長
を願い出る書類を書いてくれと言われて、自動的に復
学で授業料を発生させるという責任を負えないもので
すから、休学延長で仕方なくそういう書類を作ったん
ですが、次の機会の時にどうなるかなというのが、今
困っているというところで。だから、母国の家族で問

題が解決できないケースがかなり多いと思うので。

安井：そうですね、確かに。

宮地：最初は学力の問題から始まったんですが。

安井：ああ、なるほど。

齋藤：母国との連絡というのも、例えば研究生で、日
本に来なかったからどうなんだということを問い合わ
せたことがありますし、ちょっと精神的に病んでいる
学生に対して、母国との連絡を取るということもあり
ますが、その時の問題ってすごく大きくて、安井先生
のほうからもいろいろとやっていただくことになって
くるわけですが、今みたいに対応できない部分があっ
て、時には院生に頼んでしまう、あるいは教員の資格
を持っている人に頼らなきゃいけないということにな
りますよね。母国との連絡を取るというのはすごく大
変。当人が駄目になっちゃったときにどう家族と連絡
を取るかというのは、すごく難しいです。

安井：そうですね。本当は、母国に連絡をしなければ
いけない状況になる前に問題を発見してあげて、解決
させてあげるというのが一番いいんでしょうけど。

それに関わると思われるのが日常生活の問題で、お
そらく学力とか日常生活の中でいろいろと問題が起こ
った結果、どんどん深刻になっていくと思います。特
に最近私が感じているのは、学部生で実は日常生活の
問題といえますか、孤立してしまったり、人間関係に
悩んでしまう人が多いということです。今の宮地先生
の事例も学部生でしたが、文学部内では特に学部生が
目立っているかなというふうに感じています。

対策として、留学生アドバイジング部門でプロのカ
ウンセリングを受けてくださいとアドバイスしたり、
保健管理室には精神科医の先生がいっぱいいますの
で、そちらを案内したりも、もちろんするんですが、
それ以前、もう少し深刻さが低いといえますか、ちょ
っとした問題を日常的に解決できる場として、今一つ
やっているのが、文学研究科内の留学生からなる「ピ
アサポーターチーム」による、ピアサポーターイベン
トです。何人か自分から名乗りあげてくれた留学生が
5～6人いるんですが、ピアサポーターとしてミーテ
ィングを定期的に行って、留学生のために何かイベン
トをしようと話し合ってくれています。今度10月にも
留学生相談会を開いてくれると言ってまして、それ
は教員には言えないような問題を留学生同士で日常
会話風に話し合う中で、「私もそういうことあるよ」
というようにちょっとずつ解決していったらいいんじ
ゃないかという場です。

学部生は留学生が少ないせいもあるのかもしれない

んですが、孤立してしまう子が多いようなので、まずは学生同士が気楽に交流できる場が増えればということで、こういうことをやっていることをお知らせさせていただきます。

林：日常生活の問題で、実際に研究室であったことなんですが、留学生同士で非常に仲が悪くなっちゃって、一方が他方をいじめるといようなことがあって、いじめられた方は精神的にかなりダウンして、同じところで勉強しているものだから、誰々さんがいるところでは勉強しなくなる、みたいなことになって、学力低下を招く。そういった場合にどうしたらいいんだろうというのは教員のほうでも悩んで、実はここにある、名大の学生相談室の中にある、カウンセリングをしてくれる、精神的なほうに行って、当人も行ったみたいだし、教員としても、そういう場合にどうした方がいいのかというのは、なるべくプロの手を借りた方がいいかと判断したので、そこに行って相談をして、こういうふうにされたほうがいいんじゃないですかということでやってみたというケースがありました。ちょっと深刻だったということで。

安井：それは、いじめている側は、いじめているという自覚があったんですか。

林：あったんじゃないでしょうか。ある時に日本人学生がそれを目撃してからは、だんだんそういう行為はなくなったと。それを相談に行った時に、相談で教えてくれた先生の話では、中国の中でも、例えば民族がちょっと違うと、そういうことがけっこうあるのではないか、そういう事例はいくつか相談に乗ったことがあるみたいなことを、その先生は言われていました。

佐久間：うちの場合は、留学生同士が仲良くなった。だけど、それがその後で仲が悪くなった。男女ですけど。それは別に日本人だってそういうことは起こり得るわけですけど、日本にいる留学生の場合、いろいろ話せる人が少ないので、一方がそうなっちゃったときに精神的に不安定になってというのはありました。

安井：なるほど。

林：同じですけど、うちの場合も、ある時期は仲良かった。

安井：なるほど。じゃあ留学生がたくさんいる研究室は、留学生同士で仲良くできるから大丈夫かと安心しがちですが、その中でももちろん問題もあるんですね。

田村：中国からの留学生も何人かいますが、1人は「自分は中国人じゃない、モンゴル人だ」というふうに、はっきり違うという意識があるから、それはそう

簡単に一緒というわけにはいかないですね。民族問題はちょっとあります。

A：日本文化学講座なんかは中国人が多いですから、日本人同士の暗黙の了解以前に中国人同士の暗黙の了解の中に日本人がどう入るか。そういう問題も出てきちゃいますよね。

チューターについて

安井：次に、そこまで深刻ではありませんが、チューターの問題もあります。留学生が多い研究室によっては、チューターを担当できる日本人学生が足りないということが生じていますので、何度か先生方にはご案内差し上げていますが、「チューターバンク制度」というものを実施しております。これは文学研究科内全体でチューターを募集するものです。留学生がいない研究室に所属している日本人学生でもチューターをやりたいという学生が時々おりますので、そういう学生を別の研究室でも、分野が似ているような留学生とマッチングさせるという、研究室を超えてチューターをマッチングさせる制度がありますので、お困りの場合はご利用ください。

あとは、留学生であっても、日本に長く滞在していたり日本語が流暢だったり、チューター業務に問題ない学生であればチューターを依頼することもできますので、そういうこともまた考えていただければと思います。

保証人問題について

また、もしかすると先生方にこういった相談もあるのかなと思ひまして、保証人の問題というのも付け加えました。アパートの連帯保証人が必要だということで、「先生、保証人になってくれませんか」という相談があるかもしれませんが、これは名古屋大学留学生後援会が連帯保証事業を行っておりますので、ご案内いただければと思います。これは名古屋大学全体が保証人になるということで、アパートの管理会社にも納得いただいているようです。

最近、もう1つ出てきたことがアルバイトの保証人なんですが、アルバイトをしようとしても保証人が要るということが多く出てきているようです。だからといってアルバイトの保証人にこちらも気安くサインはできないので、これも困ったことだということで全学で議論になりました。その結果、大学生協個人賠償責

任保険という、いわゆる学研災とは別のもので、自分が加害者になってしまった場合とか何か損害を起こしてしまったという場合にもカバーしてもらえ、さらに、それが大学の正課、大学に関係するような、例えば授業やクラブ活動でなく、アルバイトであっても対応してもらえるという保険、これが4年間で4,800円と、そこまで高くないので、これに加入をさせることで、アルバイト先に「こういう保険に入っているの、留学生は日本に親族がいないということも鑑みて、保証人なしで認めてもらえませんか」という働きかけをする動きになっております。もしアルバイトの保証人という問題が出てきましたら、こちらに振っていただければ、私の方で対応させていただきます。

林：これは4年間4,800円で、在学期間1年の研究生とかでも加入できるんですか。

安井：そうです。1年ずつでもできるんです。あと、大学生協の学生組合員のみ加入できるということなので、生協の組合加入料は必要なんです。

田村：けっこう高いですね、組合加入料というのは。

安井：そうですね。ただ、あれは卒業時に返ってくるので。確か4,000円ほどなんですけども。

田村：基本的なことで、知らないでお聞きするんですが、留学生のアルバイトというのはそもそもどのぐらい許容されているんですか。

安井：届け出をするとできます。課外活動の。

田村：一応、ある限度内でアルバイトをしてもよろしいということにはなっているわけですね。

安井：はい。

齋藤：この保証人関係ですけども、こういう形でどんどんやっていただいて、非常に助かる部分が多くなってきているんですが、それでもなおかつわれわれがやらなきゃいけない保証人、よく分からないですがいろいろあつたりしますよね。例えば、中国の留学生で中国から親を呼ぶときの保証人というのは、われわれがなるしかないんですよね。

田村：中国から親を呼ぶというのは、どういうこと。

齋藤：親が中国から日本に来る。

田村：それは観光。

林：たぶん短期訪問。

齋藤：そうですね。

田村：そのときに保証人が要るんですか。

安井：はい。その場合、先生方におそらく在職証明書をご用意いただくことになります。

田村：在職証明書というのは、誰の。

齋藤：われわれの。

田村：出さなきゃいけないんですか。自分のところの学生の親が来るときに、その学生を受け入れている教員が実在するということを証明する必要があるということですね、結局。

林：そうです。日本の外務省に。

田村：それで何か問題が起こるとしたら何の問題が起こるんですか。親がやってきて、悪者の親だったりした場合、何かトラブルになるのか。

林：どっか行ってもうたとか、どっか行ってもうて勝手に働いているとか、不法滞在につながる。これはこの学生、子どもを訪ねに来ただけで、何日間か、2〜3週間、確か最大期限があったと思いますが、そしたら帰ります、帰させますという保証。

田村：そういう保証ですね。帰ってもらわないといけない責任も負うわけですか。

林：一応、そういうこと。

田村：一応、形の上では、外務省がどうなっているんですかと聞きに来るわけですね、下手すると。

安井：これも准教授以上でないといけないらしく、講師の私では対応できなかったことがあります。

齋藤：それなんか私も経験あるんですが、ほかに何かあるんですか。われわれがやらなきゃいけない保証人とか。

安井：アパートなんですけど、多くの場合、名古屋大学の後援会が保証人になるという形で許されるんですが、一度、個人の保証人でないといけないという管理会社がありました。

齋藤：まだある。

安井：はい。

田村：それはアパートのオーナーの希望なんじゃないかな。

安井：そうですね。

田村：要するに、断りたいんじゃないかな。

安井：ということですかね。一応全学のほうで確認したところ、もし万が一、教員が個人的に保証人になったときに、学生側が何か問題を起こしたとしても、その教員個人に保証の責任はないということでした。大学が責任を負うことになるらしいので、もしサインしてしまった場合でも、大丈夫だということです。

田村：それはどういうことですか。個人保証、身元保証人みたいなアパートの契約書に名前を書いても、最終的な責任は大学の後援会に回せるということですか。

安井：そうです。

田村：それはどうしてできるんですか。

安井：おそらく大学が、そこは教員個人の責任でないということで。

田村：大学が乗り出すということですね。

安井：はい。アルバイトでもそうですし、あと携帯電話の保証人というものもあるらしいです。未成年の場合。

林：クレジットカードを持てないとか、そんなんじゃないですか。

安井：そうですね。。

宮地：それこそアルバイトのことで、「私はあくまで大学の教員としてサインをすることはできるけど、そうしかできないから、住所も大学の住所も書くし、名前も宮地で書くよ」と言って、戸籍名が違いますけどと言ってやったことはあります。だから、受け入れている学生に頼まれるというのは、その関係においてあるので、保証できるとすると、その関係性においてのみだからということでそうしたんですが、そういうことがあって大学が乗り出してくれるということなんですかね。学生から頼まれるときにはということですかね。

安井：はい。

宮地：そういう理解でそういう行動をとってもいいというか、どうしても個人名じゃないといけないというアルバイト先のことがあったんです。それは実は、今は違うかもしれませんが、名大の図書館で留学生がバイトをしようと思ったら、個人の保証人が必要だと言われたと言うから、私も本当に、怒ってしまって「何それ」って。そしたら、それは大学じゃなくて、アルバイトの調達を派遣会社に委託していて、その派遣会社がそういう方針だということだったんです。「えー、おかしい」って、かなり言ったんですが。

田村：それは変えられるでしょうね。「そういう派遣会社は外すよ」と大学に言ってもらえば。

宮地：本当にそう思いました。名大の図書館で名大の学生がアルバイトをする。しかも留学生に限ってそういうことをしていると言うので、「えっ」と。4～5年前なので変わっている可能性があります。

田村：これは結局、学生が自分のお財布から保険金を払って個人賠償責任保険に入って、それでもって身元保証人を代替してもらるようにアルバイト先に働きかけるという仕組みですね。働きかけるのは、大学がやるという形になるんですか。

安井：そうですね。全学で手続きの際の様式を用意してもらっています。

田村：そうですね。じゃないと、アルバイトをやる場合に学生本人が、自分は保険に入っているから大丈夫だと言っても、さらに怪しいと思われる感じですよ。大学の仕事として、これをやらないといけないということですね。

その他

安井：では、最後、5の「その他」の部分も説明させていただきます。最近ムスリムの学生も多いため、礼拝場所が必要になっています。文学部では、以前は120号室を提供していたんですが、そこは今、助教の先生が入られているため、今では文学部棟4階から屋上に通じる階段の踊り場だとほとんど人が来ないということで、そちらを礼拝場所に使っていただいています。礼拝場所についての問い合わせがあれば、そのようにご案内いただければと思います。ちょっと不便な場所になってしまいましたが、それでも納得してくれています。

林：ちょっとあの辺からペルシャ絨毯でも買ってきて、敷いておけば。

安井：人通りも少ないということで、研究科長が「こちらを使ってはどうか」と提案してくださいました。

田村：本当に苦肉の策という感じですね、これは。

安井：そうですね。ちょっと場所がなくて。ただ金曜礼拝に限っては、インターナショナルレジデンス東山の会議室が開放されているということなので、そちらについても、もし問い合わせがあればご案内いただければと思います。

あと10分ほどですが、もし何か特に困った事例で、今までなかったようなことで何かお話し、追加されたいようなことがあればぜひ。

田村：じゃあ、ちょっと。これは研究指導の中身に関わることなので、中国の留学生の指導をたくさんなさってきた研究室にお伺いしたいんですが、論文の書き方が違うんです、パターンが。圧倒的に祖述になっちゃうんです、研究内容が割と。哲学も増えてきましたが、中国からの留学生も。ある哲学者の研究書を選んで、読んで、その内容の紹介をする、大学院レベルのマスターの1年次ぐらいで、そういうことで研究であるというふうに考えているんです。そういう場合に、それでは研究にならんよということをどういうふうに。

A：眞野さん、アピールを、授業でアピールすれば。

眞野：私ですか。日本語論文作成法という授業を担当

しております眞野と申します。中国に限らず、日本式の論文の書き方が分からないという留学生はけっこういるようで、皆さん、いろいろな研究分野があるのでなかなか難しい部分がありますが、こういう書き方をするのが普通というようなことを授業でやって、半分、45分・45分で分けて、前半のほうで一般的な書き方や日本語を書く時に注意しなければいけないことをやって、後半については、留学生の人が自分の専門で書いたものを持ってきてもらって、順番に取り上げて実例を見ながら、みんなで共有できるように一緒に考えていこうという授業をしております。

田村：それは、単位が出る授業としてやっていらっしゃるわけですね。

眞野：はい。

田村：それは、対象は。

眞野：マスターです。

齋藤：単位はマスターですが、留学生、研究生もNUPACEも来ています。

眞野：あと、ドクターの博論を書く学生も。

田村：一番困るのは、結局、何をやるのが研究なのかというところでちょっとコンセプトが違っていて、とにかく新しいことを言わなきゃいけないんだという感覚があまりないというケースがけっこう多くて、それじゃないと、これでは修士論文、目をつぶって通すわけにはいかんとなってしまいそうなんですよ。それが一番難しいという感じがします。特に哲学の場合は、西洋の哲学者を研究するのに、自分の母語で書かれた研究書を読んでそれを紹介する形で済ませてしまうケースが出てくる。そうすると、結局、日本語も西洋語もそんなにやっていなくて勉強が済んでしまうことになりかねないので、けっこう困っています。最終的に報告する時の文章は日本語で書きますから、そこは非常に苦労していると思うんですが。

宮地：日本語学でも同じですが、研究計画の段階で相当、「このやりたいと言っていることでは修士論文のテーマにはならない」と。独自のテーマを持っている人だけを受け入れるというふうにして、研究計画の段階で今まで何が分かっている、分かっているのはこれこれで、自分はどんな方法でそれを解決するということまで書いてくださいと言います。それでやりとりをして残った人を受け入れるという格好ですが、だいたいはそので連絡が来なくなるというパターン。がんばって何とか格好をつけて、がんばって書いて、計画を立てて、という子はそれでもいますので、そういう子たちを受け入れています、それでも入った後、

かなり苦労はしています。引用と自分の文章をどう書き分けるかも含め、そのあたりはテクニカルな問題と、完全に研究と紹介をごっちゃにしている場合があるので、テクニカルな問題の解決はそういう授業でやり、その中で、紹介・引用して整理してまとめて書くということと研究は違うんだということを理解してもらうしか仕方がないんですが。

佐久間：自分の研究を発表させるゼミみたいな、それを通してだんだん勉強していくと。そういう意味で、うちは日本人がいないのでちょっと困っています。

田村：研究生からマスターの1年目に入った学生で、最初の研究発表で、これは研究ではないだろうというものが出てきてちょっとびっくりしました。それまでなかったんです。留学生もみんな自分の関心でけっこう面白いことをやっていることが多かったので、今後どうするもんかと。苦労です、そこが。書き方については、厳しく指導していただいて。

眞野：がんばります。

安井：ほかに何かありますか。

齋藤：こういう問いかけをしてどういう答えを期待しているのか、自分でも分かっているんですが、今の話の流れなんです、受け入れの段階で「それでは駄目だから学部の留学生として来てください」という言い方をすることがあるんです。例えば、日本人の学生でも、実際に学部の専門とストレートに合っていない場合には、3年次編入から入れば、というやり方を現にやっていますからそういうことを勧めるんですが、そうすると、もうその時点でやめちゃうというケースが多いんです。やめてもらえればそれで終わりだから、そこまでなんですけど、ちゃんと勉強したいんだったら学部から来てほしいというのは、正直、あるんです。論文の書き方の問題からして、日本語で卒論を書くという経験をやった上で修士に来てもらったらいいと思うんですけど。

林：学部入試しなきゃ通らないでしょ。

宮地：学部から来るときは、日本語能力が、院から来るよりもなお必要になってしまうのと、単位を取るのに、専門だけでなくてほかの単位も必要。3年次編入ならかなり専門に特化されるんですが、ほかの分野もということになるので、学部から来るほうが留学生にとってはたぶんハードルが。

齋藤：ハードルが高い。たくさんのことやってくださいということに関しては大変ですけど。

田村：学部の方が、学力不振で悩んで帰っちゃう人が多くなるんですよ。

安井：多いです。休学とか多いです。

田村：年齢もあるんでしょうけど。若いというのと。哲学の研究室でも、まだ帰ったきり2年間、ありますので、彼女はどうするかな。

安井：学部の方が、ある意味、しんどいようなところもあるということですね。

田村：それから、これもざっくばらんに申しますと、学部がしんどい。マスターから入ると修士論文を書きなきゃいけないから、しんどい。博士号が欲しいと言って来る人もいるわけですよ。そういう人は人で、なかなか問題があるんです。今度は、日本語とか。日本で修士号を取っていたりするんですが、しばらく本国に帰っていたり、あるいは、日本のほかの大学で修士号を取っていて、そこで受け入れてもらえなかったから、でも博士号は欲しいと言って来るケースがあって。そうすると博士って、一応研究計画を見ると書けるんです、そういう人は。だけど、研究を独立で、自力で継続してやっていて、3年間で良い論文を書けるかという、意外にそれは大変だというのが分かる感じがして、どうしたもんかなというのはあります。学位は、割と死活的に必要なだったりしますから、そういう留学生は。

佐久間：言語学の場合、いきなり修士に行きたいと言って連絡を取ってくるんですが、やってることが生成文法だったりすると、その知識がないので受からないだろうなというのが読めちゃうので、そうすると「まず研究生になっていただいても受かりませんよ」ということを言って応対すると、もうその後連絡が取れない。そのパターンが多い。けっこう商業英語をやっているのかなみたいな間違っただけでメールを送ってき

て、そうじゃないんだということを書くと、もうそれ以降連絡が取れない。そういうケースがけっこうあります。

田村：それから、今までは中国とかアジアの中でも、英語で教育が受けられると思って連絡してくる。バングラデシュとかけっこうたくさん、かつてはあったんです。それは全部、日本語できないと駄目だと言ってパッと断っていたんですが、G30とかどうなるんですか、その関係で言うと。G30を進めるとそういうことはできるようになる。

A：それは、そのG30の内容に合えば、当然あれで、むしろ勧めていただく。

田村：あっせんしてもいい感じになるんですね、受け入れ先として。

A：はい。

田村：バングラデシュから、一時本当によく来たんですが、最初はフォーマットで断ったんですけど、あんまり多いからもう断るのもやめたりしたんですが。何日も返事しないというのがあったんです。そうすると、今後は内容に接点があればG30も可能だということですね。

安井：そうですね。場合によっては、G30の方でも、まず研究生からということもあり得るんですね。どうなんですかね。

A：それはどうなんですかね。でも、今年受けた人は研究生だったわけじゃないので。

安井：ありがとうございます。では、これ以上なければこれで終わらせていただきます。色々と参考になりました。ありがとうございました。